

句集

絵馬

中根健



句集

絵馬

中根
健



文學の森



句集
絵馬えま

発行 平成二十七年七月十日

著者 中根 健

発行者 大山基利

発行所 株式会社 文學の森

〒一六九—〇〇七五

東京都新宿区高田馬場二—二 田島ビル八階

tel 03-5292-9188 fax 03-5292-9199

e-mail mori@bungak.com

ホームページ <http://www.bungak.com>

印刷・製本 小松義彦

©Ken Nakane 2015. Printed in Japan

ISBN978-4-86438-442-1 C0092

落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

句集 絵馬◇目次

序 伊藤敬子 1

平成十七年～二十二年 11

平成二十三年～二十四年 57

平成二十五年～二十七年 115

あとがき 170

序

伊藤敬子

中根健さんの句集『絵馬』が出版の運びとなったことは、まことによろこばしい。

中根健さんはいつも、とにかく多忙の渦中に身を置いて精一杯生きていく人であるが、その多忙の中にあって、詩を理解して詩の深い処で遊ぶことの秘法を知っている人でもある。中根さんのみに与えられた時間的空間的世界があって、人知れずひそかに形成されたその世界は生きるよろこびにつながっていることの証左でもあるの

だろう。

「笹」の会計係という一番面倒な仕事もやってもらっているし、皆さんの「笹」への投句が郵便局へ送られてくる、その私書箱を鍵をもって開けて山のような原稿を運んでくる、という面倒な仕事も受け持ってもらっている。中根さんは会員の信頼感もあつて、黙々と好意をもって続けてもらっている。

もともと理系の技術屋として、名古屋港のトリトンという優美な橋を設計して工事に携った人でもある。長年にわたって好意をもつて一つの仕事が続けられるという人はそう多くないのであるが、本当にやさしい信念を貫いて生きることのできる包容力のある人、善意の人である。

作品は平明で誰にでもわかる句を作りたいというのが中根さんの希望である。そういった信念のもとに着々と作られてきた作品ばかりである。観念に遊ぶという面はない。そして小さなもの、か弱きものに寄せる愛は人一倍大きい。

子目高の健気に泳ぎ雨上がる

この句からもわかるように絶滅危惧種の目高を飼育して観察を続けているというのである。目高には多くの種類があつて、そのちがいを観察するというのはかなり学究的な側面のある生態の観察に、興味を寄せているという観点が強調されてくる。中七の表現がよかった。

絵馬に書く志望校名母の手で

この句には主体としての人間が描かれている。「絵馬」に自分の名前を書くのは受験生自らの手で——というのが一般的であるが、中根さんの鋭い視点に把握されたのは、その受験生の母親の手で受験生の名前と志望校が書かれている、その現場を見たのであろう。幸せな受験生とみるか、親に甘えすぎとみるか、意見のわかれるところであるが、家中で受験生を応援しているその親子の絆の強さに

現代の家庭像がよみとれる。結局、中根さんの人間としての温かさゆかしさの眼が根底にあつて、この絵馬の句を作らせたとみることができる。題名を『絵馬』とすることをお奨めしたゆえんである。

乾坤の技飛び飛びに梅開く
高きより輪廻転生滝しぶき
樂しみを一つ増やして目高飼ふ
薄雪草最北の地に慎ましく
着実に生きて半生鉦叩
姨岩の粗き岩肌草紅葉
寒晴の光を受けし鯢二つ
並び立つ命一寸名草の芽
火を点けて老母に手渡す花火かな
葦に身をまかせて揺るる行々子
ぼうたんの真紅に明日を疑はず

子ら担ぐ手製神輿に秋日濃し
盛砂の尖る辺りの淑気かな

本句集に佳吟は幾多おさめられているが、ここに十三句を選び出した。作句の現場も納得できる作品ばかりである。

とにかくじっくりと対象に向かつて、十七音をつむぎ出して、味わいの深い詩的空間を文字に托す、中根さんの句境は殊に味わいが深く且つ平明である。

今後もご健康に留意されて、自己の信ずる俳句の道を真つ直ぐに進んでいつて貫きたいと念願する。

句集『絵馬』の上木を心から祝し、今後のご活躍を祈って序文を草する次第である。

平成二十七年 立夏

句集 絵馬◇目次

序 伊藤敬子

1

平成十七年～二十二年

11

平成二十三年～二十四年

57

平成二十五年～二十七年

115

あとがき

170

装丁 三宅政吉

句集

繪馬

平成十七年～二十二年

煌めける湖を見下ろし春惜しむ

立春や校庭の犬吠え続け